

令和6年度 特別の教育課程（書道科）の実施状況等について

牛山小学校

1. 本校の教育目標

自らのよさに自信をもち、主体的に粘り強く課題に取り組むとともに、心身ともに健やかな児童を育成する。

2. 特別の教育課程の内容

（1）特別の教育課程の概要

小学校第1～6学年において新教科「書道科」を新設する。第1学年は、国語を30時間、生活科を4時間削減して新教科に充て、第2学年は、国語を30時間、生活科を5時間削減して新教科に充てる。第3～6学年は、国語を30時間、総合的な学習の時間を5時間削減して新教科に充てる。「書道科」において、書を書くという具体的な活動を通し、友だちと触れ合ったり、家庭生活での話題をもたらしたり、地域の人々とのかかわりを生んだりする。そこから、集団の中での自分の役割や行動の仕方を考えさせるとともに、「書のまち」に生きるよさと愛着をもたせる。

また、「書道」という伝統文化や「書のまち」を発信する地域の特性を探究する活動にも取り組むことを通して、表現力の向上と向上心の伸長を図るとともに、日本古来の文化や自分の生活する地域を振り返りながら自己の生き方をも考えさせる。

（2）特例の適用期間

平成27年4月1日～令和11年3月31日

（3）実施学年

1年、2年、3年、4年、5年、6年、（特別支援学級 単独でも実施）

（4）地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

本市は、三蹟のひとり小野道風の生誕の地と言われており、全国的にも数少ない書専門の美術館小野道風記念館を有し、「書のまち春日井」として、書道の普及発展に力を入れている。特に、小野小学校では、愛知県下児童・生徒席上揮毫大会が昭和11年から戦争中も途切れることなく開催され、第1回からの優秀作品を保管するなど、愛知県の書道教育の中心的な役割を果たしている。

書道は、「文字を正しく整えて書く」ことにおいて、従前から行われてきた国語科における書写の目的に共通するが、その文化・芸術性及び精神性においては、書写とは一線を引くものである。現在、児童の「表現力の向上」「心の教育の充実」などが重要な教育課題であると認識している。それらを解決するため、前述した地域性や学校の特色、さらには書道の特性を活かした「書道科」を新設し、表現力の向上を目指すとともに、よりよい作品をつくりあげようとする向上心、つくりあげた達成感から得られる自尊感情、相互評価などの他者との関わりから得られる親切心や規

範意識等、特に心の充実を図りたいと考える。また、同時に郷土愛についても、書道を通して「書のまち春日井」に根ざして生活している自覚を促し、育てていく。

（５）学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

２に記載する特別の教育課程について、教育基本法（平成 18 年法律第 120 号）及び学校教育法（昭和 22 年法律第 26 号）に規定する小学校等の教育の目標に関する規定等に照らして適切であることを、春日井市教育委員会において確認済。

３．特別の教育課程の実施状況に関する評価

（１）評価の観点

- ① 特別の教育課程の編成・実施により、学校の教育目標が十全に達成されているか
- ② 教育課程全体としてバランスのとれた教育活動が実施され、学校教育法に示す学校教育の目標が十全に達成されているか

（２）自己評価

児 童	・ 3 年生の時よりうまく書けるようになった。頑張ったことは、名前です。これまで学校で書写を勉強したおかげで、家族にほめられる事が嬉しいです。 ・ 習字の授業で字が上手になりました。 ・ 筆使いがうまくできるようになりました。「とめ」「はね」「はらい」を意識して、字のバランスを見て文字を書くことができるようになりました。自分の中で課題を決めてそのことに向けて授業をすることを頑張りました。
教 員	・ 多くの児童が書の時間を楽しみにしており、作品が仕上がるたびに掲示される自分の作品や友達のをうれしそうに見ている姿が印象に残っている。 ・ 「書の作品展」がなくなって、余裕をもって授業を進められるようになった。普段落ち着きがない子も落ち着いて自分と向き合ういい時間になっている。
保護者	・ 低学年から毛筆の授業が始まり、筆遣いに慣れることで成果が表れていると感じます。また、机に向かう姿勢もよくなっていると思います。 ・ 1 年間の作品を振り返ると、少しずつ成長を感じます。

（３）学校関係者評価

・ 6 年生の「大きな書」の作品は、迫力がありすばらしい。書のまとめとしてのよい活動だと感じる。 ・ 「書のまち」として、全市、全校での取組を、継続的に行うことが大切。
--